

## II. 史跡牛頸須恵器窯跡の概要

### 1. 指定概要

#### (1) 指定に至る経過

牛頸須恵器窯跡は、大正時代に窯跡の存在が知られるようになった。その後、高度成長期の昭和30年代以降、開発に伴う発掘調査が続き、報告書も数多く刊行された。発掘調査で確認された窯跡については、極力事業者と保存に関する協議を行い、緑地に保存された窯跡や事業者の好意により保存された窯跡もあったが、多くの窯跡は調査後消滅した。しかし、大野城市教育委員会は窯跡を保存・活用しようとする意思が強くあり、その場所や方法を模索していた。

大野城市は平成になっても人口増が続いていたため、南部にある平野中学校の分離校建設が計画され、月の浦団地西側の山林を平成6・7年度に買収した。ここは既に窯跡があると推測されていた場所のため、平成11・12年度に試掘調査を実施し、複数の箇所で窯跡が存在することが明らかになった。分離校建設に伴い造成工事が行われれば窯跡が消滅してしまうため、職員提案を行い、保存・活用の要望を強く行った。一方で、生徒数の増加は当初予測していたほどではなかったため、分離校については建設を見送り、平成14年度に市役所内部で「平野中学校分離校予定地利用検討プロジェクトチーム」が組織され、新たな土地利用が検討された。その結果、平成14年度末に報告書がまとめられ、埋蔵文化財資源の有効活用、教育関連利用が打ち出された。

こうした状況を踏まえ、平成15年度から分離校予定地内の窯跡を保存活用するための確認調査を実施することとした。平成16年度にも継続して当該地の確認調査を行い、平成17年2月に文化庁調査官の現地指導を受け、国史跡指定の方針が示された。

文化庁調査官からは、国史跡を実現するためには

**○窯跡の分布調査を行って、牛頸須恵器窯跡の範囲を確定すること**

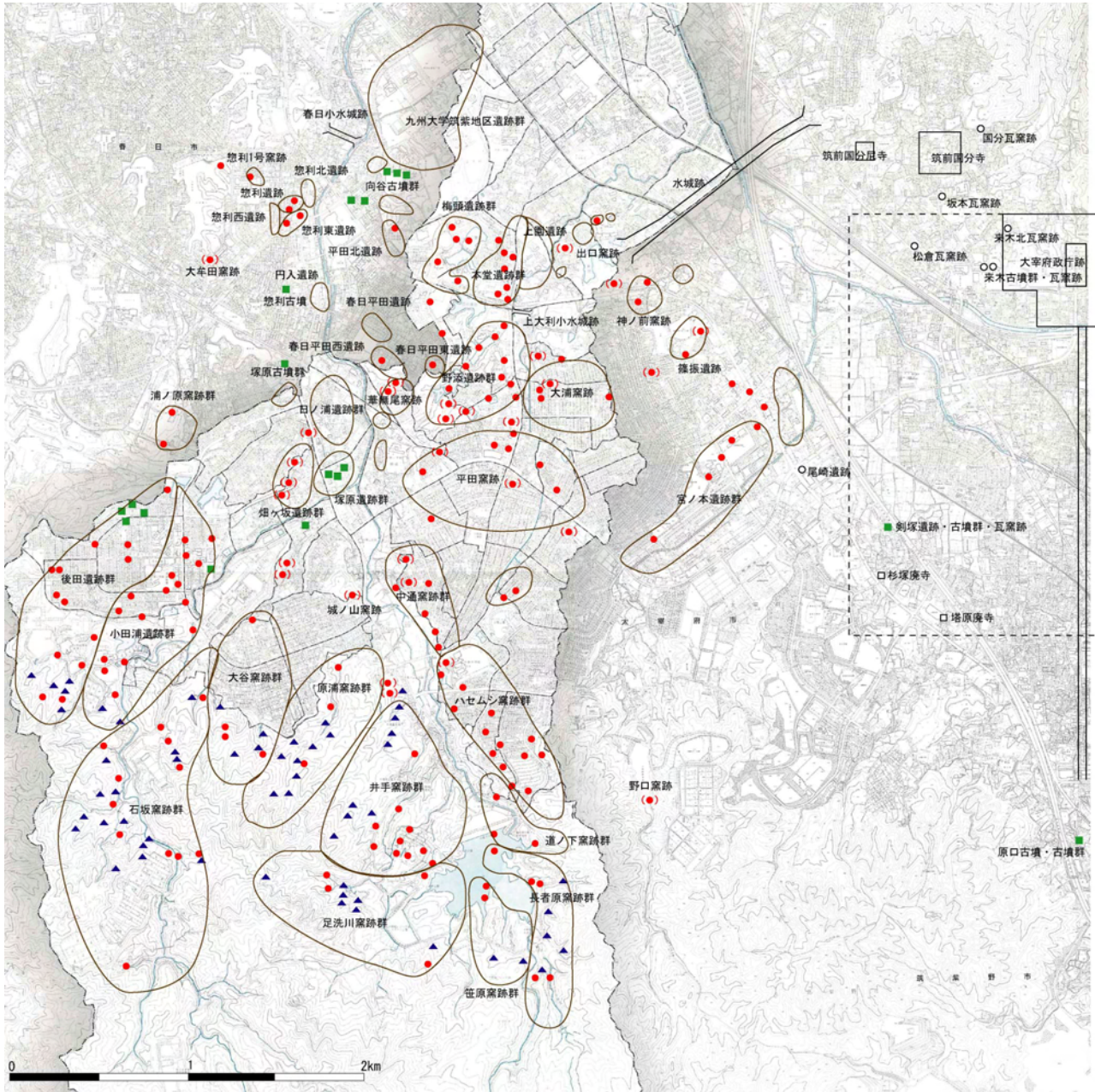
**○牛頸須恵器窯跡のすべてがわかる総括報告書の作成をすること**

の指導を受けた。このため、これらの課題を実現するため作業を開始した。

また、市長も平成17年3月に開催された平成17年第2回市議会定例会冒頭において、市政方針として牛頸須恵器窯跡の国史跡指定に取り組むことを表明した。

窯跡の分布調査は平成17年度から19年度の冬に行ったが、本市だけではなく、福岡県教育委員会、太宰府市教育委員会ほかの近隣市町村職員の協力を受けて行った。また、総括報告書は18年度から19年度にかけて作成した（『牛頸須恵器窯跡—総括報告書Ⅰ—』平成20年3月31日刊行）。これについても多くの方の協力を得た。

その後、指定地の範囲などについて、文化庁との協議や現地視察を受け、地権者の承諾を得て、平成20年7月に国史跡指定の意見具申を行った。同年秋には文化庁文化審議会の答申があり、翌平成21年2月12日に「牛頸須恵器窯跡」の名称で国史跡指定の官報告示があった。



第1図 牛頸須恵器窯跡周辺遺跡分布図

図例	区分
●	窯跡
▲	須恵器散布地
□	寺院跡
○	集落他
(●)	未調査消滅の窯跡
■	古墳
≡	小水城跡
≡≡≡	水城跡

## (2) 指定範囲

官報告示 文部科学省告示第6号文化財保護法（昭和25年法律第214号）第109条第1項の規定により、次の表に掲げる記載を史跡に指定する。

平成21年2月12日

名称：牛頸須恵器窯跡

所在地：①福岡県大野城市上大利5丁目 224番のうち実測258.59平方メートル

②同 牛頸1丁目 2391番1、2392番1、2392番5

③同 大字牛頸 488番1、548番1、565番9、565番14、565番19、565番23、565番24、565番25、565番26、569番19、667番42のうち実測5279.92平方メートル、670番60、2181番25、2181番27、2189番6のうち実測5207.58平方メートル、2189番8のうち実測4943.99平方メートル、2190番15、2190番16、2365番11、2365番13、2365番14、2375番4のうち実測50726.19平方メートル、2375番6のうち実測113.58平方メートル、2472番22、2472番23、2472番24、2472番25、2472番28、2472番45、2472番46、2472番47、2472番57

右の地域に介在する道路敷及び水路敷、福岡県大野城市大字牛頸2472番28と同2472番59に挟まれる道路敷、同大字牛頸2181番5と同2181番27に挟まれ同2181番25と同2181番29に挟まれるまでの道路敷、同大字牛頸565番14と同565番24に挟まれ同569番75に北接するまでの道路敷、同大字牛頸565番24と同569番19に挟まれ同569番75に北接するまでの水路敷を含む。

備考：一筆の土地のうち一部のみを指定するものについては、地域に関する実測図を福岡県教育委員会及び大野城市教育委員会に備え置いて縦覧に供する。

## (3) 指定内容

牛頸須恵器窯跡は、福岡平野の東南部、牛頸山北麓の低丘陵上に分布する6世紀中ごろから9世紀中ごろにかけて操業された須恵器<sup>\*</sup>の窯跡群である。窯跡は大野城市を中心に春日市、太宰府市の一部を含む東西4km、南北約4.8kmの範囲内に分布し、西日本有数の規模を持つ。

牛頸における初の本格的な発掘調査は昭和43年に福岡県教育委員会により行われた。以後、福岡県教育委員会、大野城市教育委員会などにより区画整備事業や牛頸川治水ダム建設に伴う発掘調査が実施され、窯跡の分布状況や内容が明らかになった。1990年代後半以降には、梅頭窯跡<sup>うめがしらかまあと</sup>などが現地保存され、平成18・19年には大野城市教育委員会が窯跡分布範囲の南側地域を中心に悉皆的分布調査を実施した。その結果、新たに80ヶ所の奈良時代に属する須恵器散布地が見つかり、そのうち25ヶ所で灰原<sup>はいばら</sup><sup>\*</sup>が確認されたことから、現在でも約200基近い窯跡が良好に現地に残されていると推定される。

牛頸須恵器窯跡は、これまでの分布調査の結果から、河川流路を中心とした地形により5グループに分けられ、さらにその中で支群に細分することが可能である。大きく見て6世紀中ごろから後半に北側の平野部に近いグループで操業が始まり、6世紀末から7世紀前半には南側山間地のグループのうち比較的標高の低い位置に分布が拡大、7世紀後半から8世紀には標高の高い場所に分布の中心が移るという時期別変遷が見られる。

牛頸須恵器窯跡における窯構造は丘陵あるいは山地斜面をトンネル状に掘削、構築する地下式窯<sup>あながま\*</sup>である。その規模は創業期の6世紀中ごろから末にかけて大型化が進み、6世紀末から7世紀前半には全長が10mを超す大型のものが多くなるが、7世紀中ごろに小型化が始まり、8世紀になると全長3m程度のもので一般化する。窯の大型化が進む時期には、牛頸須恵器窯跡特有の焼成部奥に2〜6個の煙道をもつ多孔式煙道窯<sup>たこうしきえんどうよう\*</sup>が一般化するが、以後にその割合は減少し、8世紀にはほぼ消滅する。古墳時代<sup>\*</sup>から奈良時代前半の焼成器種は、杯<sup>つぎ</sup>、瓶類<sup>へいり</sup>、甕<sup>かめ</sup>など多様であるが、奈良時代中ごろになると杯、皿などの小型の器種に特化する。その流通範囲は、古墳時代には福岡平野周辺に限定的であるが、奈良時代<sup>\*</sup>になると律令制下の国境を越えて、肥前・豊後国などにも広がること、須恵器の器形やヘラ記号<sup>\*</sup>の検討、胎土分析<sup>\*</sup>の結果からわかる。一方、筑前国は、調<sup>ちよう\*</sup>としての須恵器甕<sup>こうのう</sup>の貢納<sup>こく</sup>国<sup>えんぎしき\*</sup>の一つとして『延喜式』に記されているが、出土遺物に「調大甕一隻和銅六年」とヘラ書きされた須恵器甕があることから、その焼成が牛頸でなされたことは確実である。奈良時代の九州における調はまず大宰府に納められており、それを介した須恵器流通の具体的内容を理解するうえでも貴重である。

なお、上大利グループの窯の一つで6世紀末から7世紀に操業された梅頭窯跡ではその廃窯後に墓として転用され、銀象嵌鉄刀<sup>ぎんぞうかんてつとう\*</sup>、鉄鏃<sup>てつぞく</sup>、ベンガラ入り須恵器杯身<sup>つぎみ</sup>が副葬された事例がある。被葬者と須恵器工人の関係などを検討するうえで貴重である。

このように牛頸須恵器窯跡は、奈良時代から平安時代初頭にかけて調納制や大宰府を介した流通システムのもと、北部九州全体に古代須恵器を供給した大規模窯である。また古墳時代から古代<sup>\*</sup>にかけての須恵器窯業形態の変遷過程もよく示し、古代須恵器の生産と広域の流通の実態を知るうえで欠くことのできない遺跡である。よって、史跡に指定し保護を図ろうとするものである。(『月刊「文化財」平成21年2月号より』)

## 2. 史跡牛頸須恵器窯跡の価値

### (1) 牛頸須恵器窯跡の位置と環境

牛頸須恵器窯跡は、大野城市南端に位置する牛頸山（449.3m）の北麓に位置する須恵器窯跡群である。この一帯は、花崗岩を基盤とする地域で、これを中小の河川が開析することによって無数の丘陵が作り出され、窯跡はこれら丘陵の斜面部に構築されている。

窯跡の分布範囲は、大野城市上大利と牛頸地区を中心として、春日市・太宰府市の一部を含む東西約4km、南北約4.8kmの範囲に広がっており、その立地は、福岡平野を北側に望み、なつのみやげ★「那津官家」の推定地である那珂・比恵遺跡群から約6.0km南東側、大宰府政庁跡から2.0km西側に位置する。

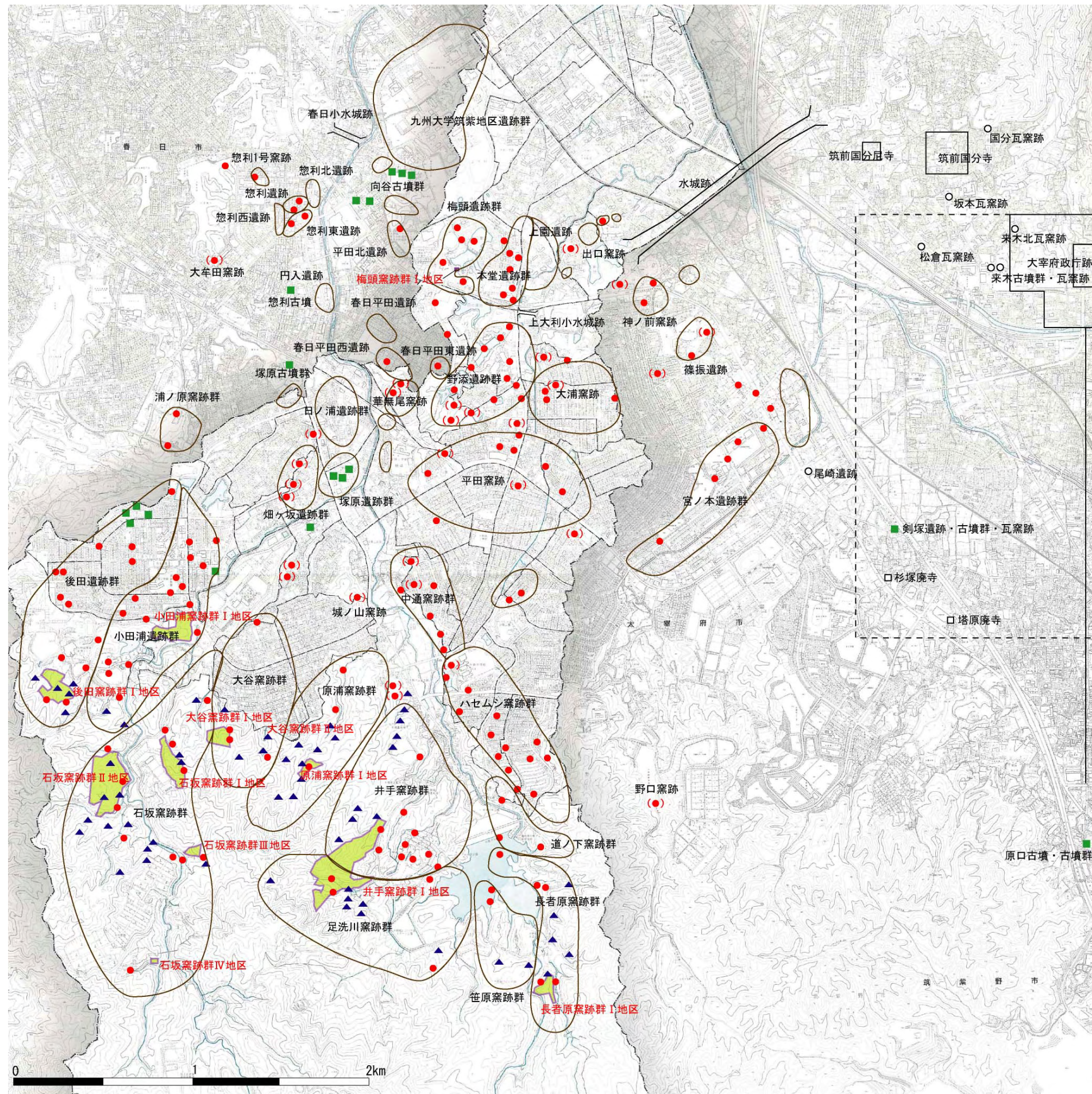
これら牛頸須恵器窯跡のうち、国史跡として指定されたのは12ヶ所に分かれている。これら個々の指定地について、呼称を設定し、計画策定から整備活用に使用する。なお、呼称はこれまでの調査成果を踏まえ、遺跡群の名称+遺構種別+ローマ数字+地区とし、順番は谷の入口より順次上方へ番号を付するものとする。



番号	名称
①	梅頭窯跡群Ⅰ地区
②	小田浦窯跡群Ⅰ地区
③	後田窯跡群Ⅰ地区
④	石坂窯跡群Ⅰ地区
⑤	石坂窯跡群Ⅱ地区
⑥	石坂窯跡群Ⅲ地区
⑦	石坂窯跡群Ⅳ地区
⑧	大谷窯跡群Ⅰ地区
⑨	大谷窯跡群Ⅱ地区
⑩	原浦窯跡群Ⅰ地区
⑪	井手窯跡群Ⅰ地区
⑫	長者原窯跡群Ⅰ地区



第2図 史跡指定地域位置図



図例	区分
■	指定地区
●	窯跡
▲	須恵器散布地
□	寺院跡
○	集落他
(●)	未調査消滅の窯跡
■	古墳
≡	小水城跡
≡	水城跡

第3図 史跡指定地域図

表3 史跡指定地区の詳細

No.	名称	地番	面積	地目	所有者名
1	梅頭窯跡群 I 地区	大野城市上大利五丁目 224 番	258.59	公園	大野城市
2	小田浦窯跡群 I 地区	大野城市牛頸一丁目 2391 番 1	186.00	畑	大野城市土地開発公社
		大野城市牛頸一丁目 2392 番 1	19,459.00	山林	大野城市土地開発公社
		大野城市牛頸一丁目 2392 番 5	253.00	山林	大野城市土地開発公社
3	後田窯跡群 I 地区	大野城市大字牛頸 2472 番 22	3,052.00	山林	大野城市土地開発公社
		大野城市大字牛頸 2472 番 23	5,014.00	山林	大野城市土地開発公社
		大野城市大字牛頸 2472 番 24	2,098.00	山林	大野城市土地開発公社
		大野城市大字牛頸 2472 番 25	6,983.00	山林	大野城市土地開発公社
		大野城市大字牛頸 2472 番 28	1,792.00	山林	
		大野城市大字牛頸 2472 番 45	87.00	山林	大野城市
		大野城市大字牛頸 2472 番 46	1,327.00	山林	大野城市土地開発公社
		大野城市大字牛頸 2472 番 47	85.00	山林	大野城市
		大野城市大字牛頸 2472 番 57	1,202.00	山林	大野城市土地開発公社
		大字牛頸 2472 番 57 と 大字牛頸 2472 番 24 に挟まれる道路敷	30.00	道路	大野城市
		大字牛頸 2472 番 59 と 大字牛頸 2472 番 28 に挟まれる道路敷	36.00	道路	大野城市
大字牛頸 2472 番 23 と 大字牛頸 2472 番 25 に挟まれる道路敷	151.00	道路	大野城市		
4	石坂窯跡群 I 地区	大野城市大字牛頸 2365 番 11	1,260.00	山林	大野城市
		大野城市大字牛頸 2365 番 13	1,447.00	保安林	大野城市
		大野城市大字牛頸 2365 番 14	2,086.00	山林	大野城市
5	石坂窯跡群 II 地区	大野城市大字牛頸 2375 番 6	113.58	保安林	大野城市
6	石坂窯跡群 III 地区	大野城市大字牛頸 2190 番 15	5,285.00	山林	
		大野城市大字牛頸 2190 番 16	14,483.00	山林	
7	石坂窯跡群 IV 地区	大野城市大字牛頸 2375 番 4	50,726.19	保安林	
8	大谷窯跡群 I 地区	大野城市大字牛頸 2189 番 6	5,207.58	山林	大野城市
		大野城市大字牛頸 2189 番 8	4,943.99	山林	大野城市

(注) 所有者名欄の空白は、民有地

No.	名称	地番	面積	地目	所有者名
9	大谷窯跡群Ⅱ地区	大野城市大字牛頸 2181 番 25	796.00	山林	
		大野城市大字牛頸 2181 番 27	1,323.00	山林	
		大字牛頸 2181 番 25 と大字牛頸 2181 番 29 に挟まれ、大字牛頸 2181 番 27 と大字牛頸 2181 番 5 に挟まれるまでの道路敷	44.00	道路	大野城市
10	原浦窯跡群Ⅰ地区	大野城市大字牛頸 548 番 1	5,644.00	原野	大野城市
11	井手窯跡群Ⅰ地区	大野城市大字牛頸 488 番 1	43,017.00	山林	
		大野城市大字牛頸 565 番 9	8,776.00	山林	
		大野城市大字牛頸 565 番 14	5,063.00	山林	
		大野城市大字牛頸 565 番 19	7,586.00	山林	
		大野城市大字牛頸 565 番 23	322.00	山林	
		大野城市大字牛頸 565 番 24	777.00	山林	
		大野城市大字牛頸 565 番 25	34.00	山林	
		大野城市大字牛頸 565 番 26	521.00	山林	
		大野城市大字牛頸 569 番 19	8,444.00	保安林	大野城市
		大字牛頸 488 番 1 に囲まれる水路敷	278.00	水路	大野城市
		大字牛頸 565 番 25 と大字牛頸 565 番 19 に挟まれ、大字牛頸 565 番 14 と大字牛頸 565 番 23 に挟まれるまでの道路敷	114.00	道路	大野城市
		大字牛頸 565 番 26 と大字牛頸 565 番 19 に挟まれ、大字牛頸 565 番 23 と大字牛頸 565 番 9 に挟まれるまでの水路敷	157.00	水路	大野城市
		大字牛頸 565 番 25 と大字牛頸 565 番 14 に挟まれる水路敷	15.00	水路	大野城市
		大字牛頸 565 番 24 と大字牛頸 565 番 14 に挟まれ、大字牛頸 565 番 75 に北接するまでの道路敷	211.00	道路	大野城市
大字牛頸 565 番 9 に南接する水路敷	25.00	水路	大野城市		
大字牛頸 569 番 19 と大字牛頸 565 番 24 に挟まれ、大字牛頸 569 番 75 に北接するまでの水路敷	194.00	水路	大野城市		
12	長者原窯跡群Ⅰ地区	大野城市大字牛頸 667 番 42	5,279.92	山林	大野城市
		大野城市大字牛頸 670 番 60	3,433.00	山林	大野城市
合計					219,619.85

注) 所有者名欄の空白は、民有地



## (2) 牛頸須恵器窯跡の特徴

### 1) 遺構

#### ① 窯跡の数

牛頸須恵器窯跡では、これまでの発掘調査（福岡県・大野城市・春日市・太宰府市教育委員会、立正・大谷女子・国士舘大学）の結果、約300基もの須恵器窯跡が確認されている。さらに平成18～19年度に行った分布調査の結果、87ヶ所で須恵器の散布、さらに25ヶ所で灰原等を確認した。採集された須恵器のほとんどは7世紀後半以降のもので、これまでの調査でこの時期の窯跡は1ヶ所に平均して4基あると考えられるので、山中にはなお100基以上の窯跡が遺存していることが推測される。また、発掘調査等を経ないまま消滅した窯跡も相当数あると思われる。これらのことから、牛頸須恵器窯跡の総基数は500基を超えると推定される。

この規模は、現在のところ陶邑窯跡群や猿投山窯跡群に次ぐものと考えられ、西日本では陶邑窯跡群に次ぐ規模で、九州最大の須恵器窯跡群であることが明らかになった。

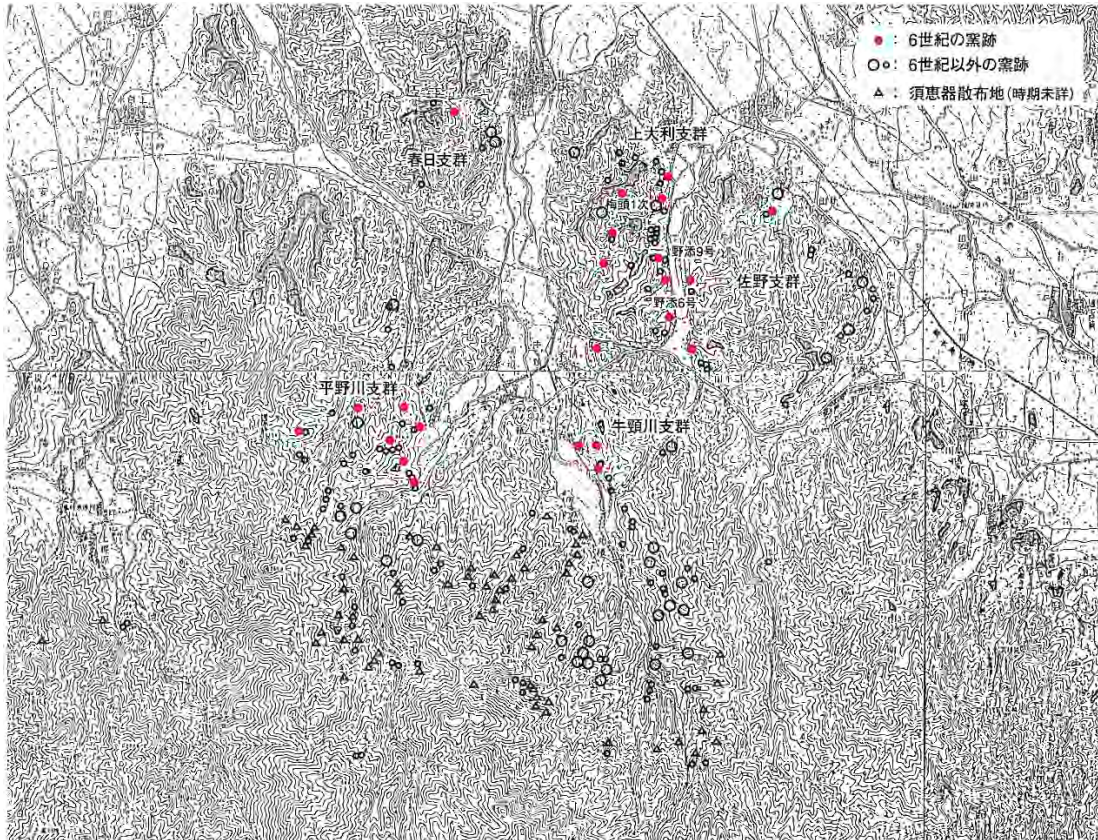


第4図 三大窯跡群分布図

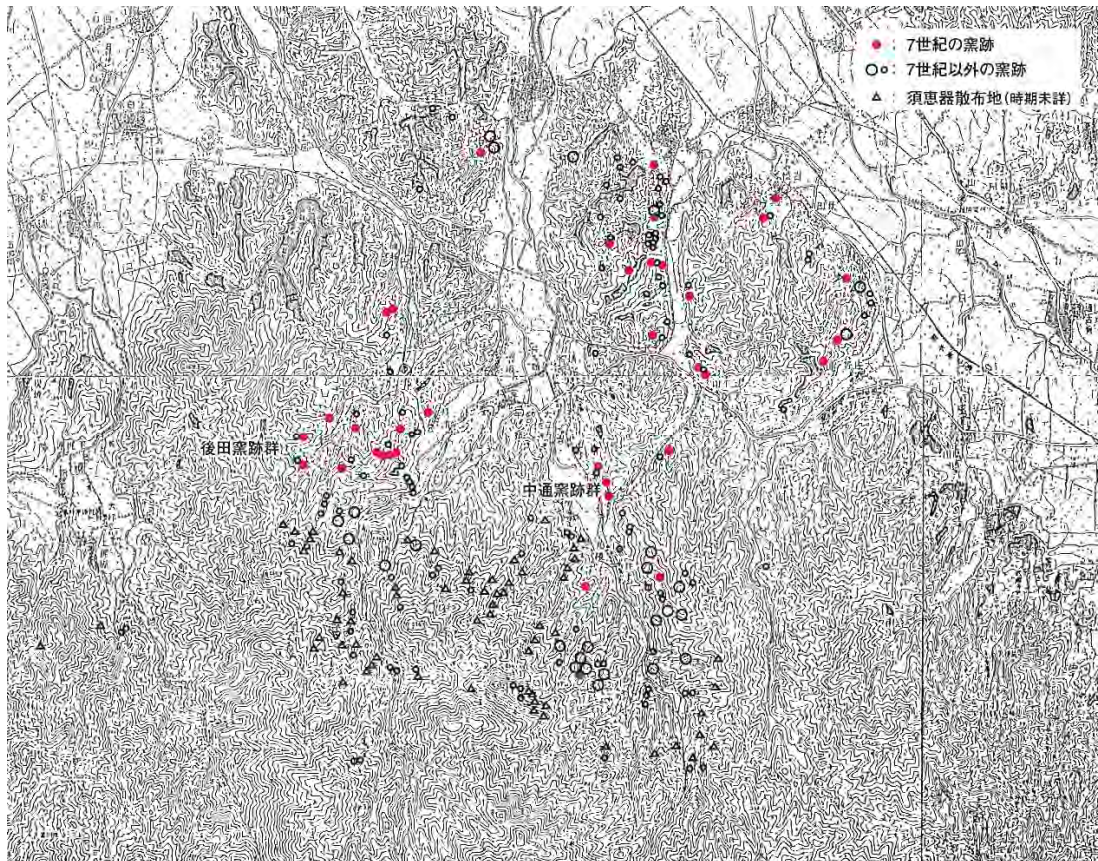
#### ② 時期と変遷

現時点で確認されている出現期の窯跡は、6世紀中頃に位置づけられる。窯は牛頸須恵器窯跡の北側の本堂遺跡群や野添窯跡群で確認されている。その後、6世紀末には、小田浦窯跡群や後田窯跡群、ハセムシ窯跡群など群の中南部地域まで広がる。さらに8世紀代には、石坂窯跡群など南部地域に広がる。8世紀末には急激な衰退がはじまり、終末期（9世紀中頃）の資料としては、石坂窯跡群E地点3号窯が挙げられる。

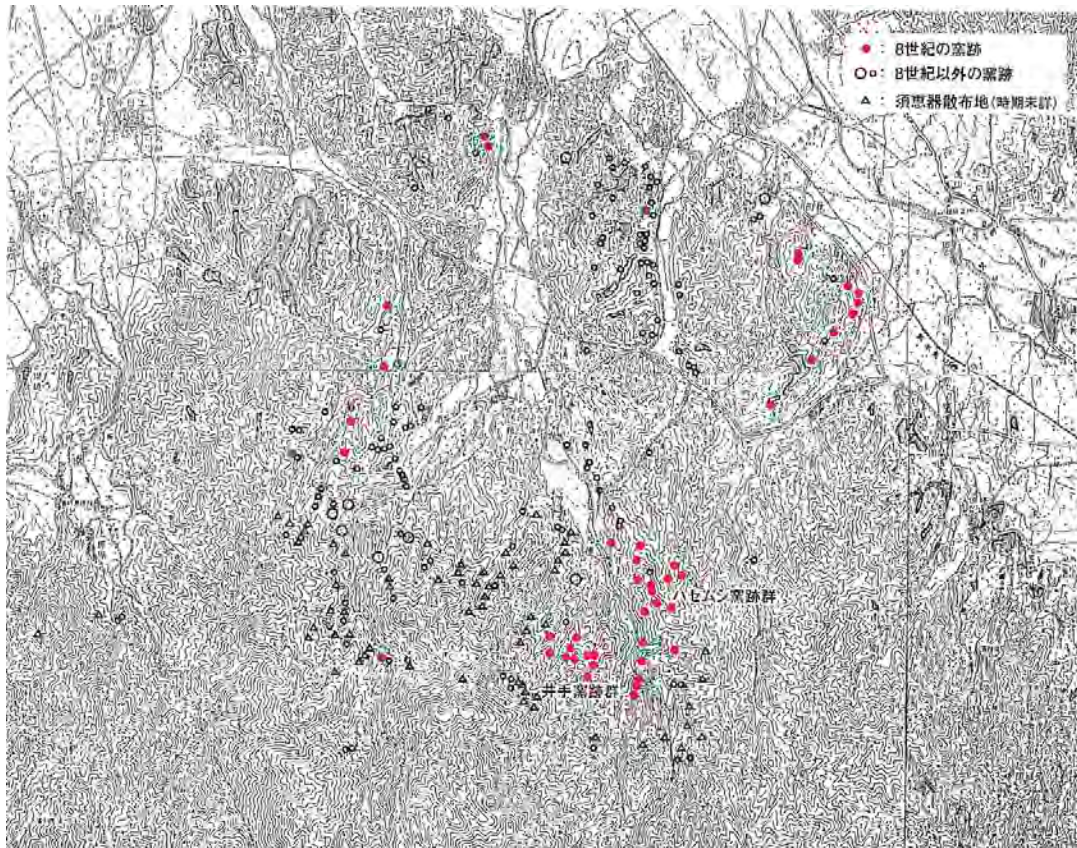
このような窯の時間的・地理的動態を巨視的に見た場合、窯はいくつかの支群に分けることができる。この支群は、時期が下がると全体に山奥へ向かうものもあるが、平野に近い丘陵の一定の範囲で操業しているものもある。



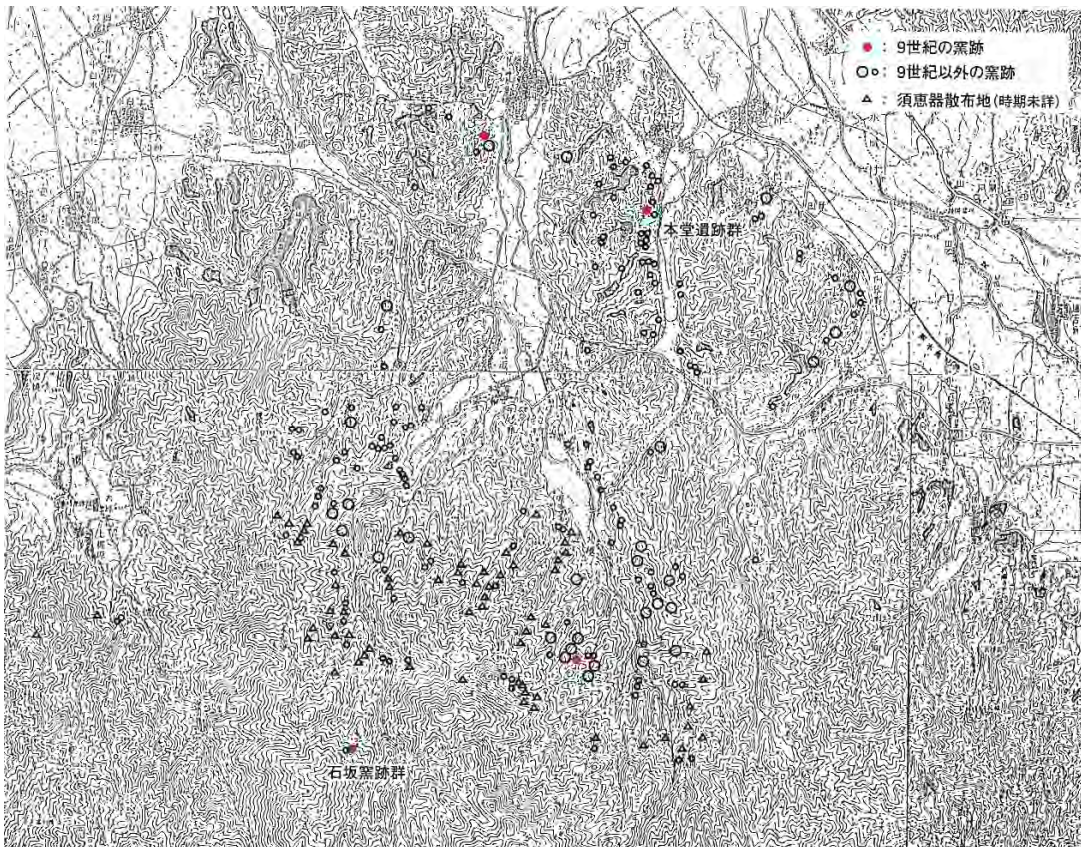
第5図 6世紀の窯跡分布図



第6図 7世紀の窯跡分布図



第7図 8世紀の窯跡分布図



第8図 9世紀の窯跡分布図

### ③ 窯体構造

窯は、基本的に丘陵斜面をトンネル状に掘削し構築したもので、地下式窖窯と呼称される。ただ、一部の窯跡では、地下式構造の窯体の一部を半地下式・地上式<sup>\*</sup>に構築しているものもある。

窯体の規模は、6世紀末～7世紀前半に最大（全長10m以上）となるが、7世紀中頃には小型化が始まり、8世紀代には全長3m程度の窯跡が一般化する。これに合わせ、焼成器種にも変化がみられ、古墳時代<sup>\*</sup>には杯・瓶類・甕などの多様な器種を焼成していたのに対し、奈良時代中頃には杯・皿などの小形器種の焼成に特化した状況が明らかとなっている。

窯体の構造は、時期によって変遷がある。構造的な特徴から、いくつかの類型にまとめられるが、なかでも最も特徴的なのは、牛頸須恵器窯跡に特有な「多孔式煙道窯」と呼ばれる一群である。多孔式煙道窯とは、窯の平面形が焚口部から焼成部・煙道部まではほぼ一定の幅でのびる短冊形を呈し、焼成部奥に2～6個の煙道を有する窯跡の総称である。複数の小形の煙道を設けることによって、煙道の開閉による窯内温度調整作業を容易にしたものと考えられる。

牛頸須恵器窯跡で操業が始まった6世紀中頃は、窯の平面形が紡錘形となる構造であったが、窯の規模が最大化する6世紀末～7世紀前半になると多孔式煙道窯が盛行する。しかし、多孔式煙道窯は7世紀中頃～後半には直立煙道窯と並存し、そして8世紀には姿を消す。新しく出現する直立煙道窯は、奥壁から煙道部が直立する構造であり、7～9世紀の牛頸須恵器窯跡の基本的な窯体構造となる。



多孔式煙道窯の操業の様子（古墳時代） イラスト：岩本 恵



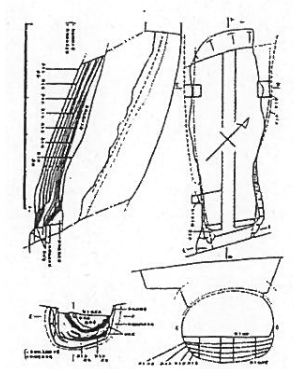
直立煙道窯の操業の様子（奈良時代） イラスト：岩本 恵

五世紀代

六世紀前半

この時期の窯は確認されていない。

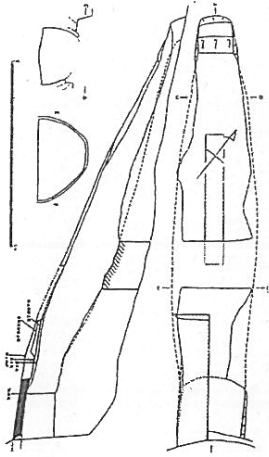
六世紀中頃



野添6号窯跡

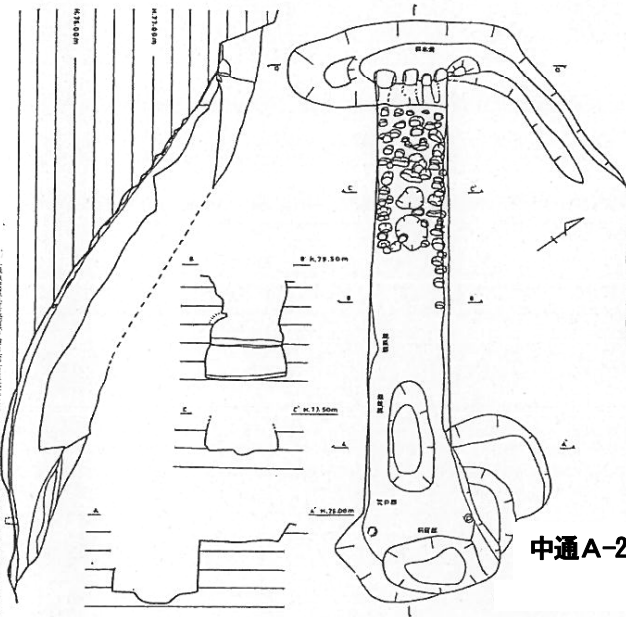
第9図 牛頸須恵器窯跡窯体構造変遷図① S=1/200

六世紀後半

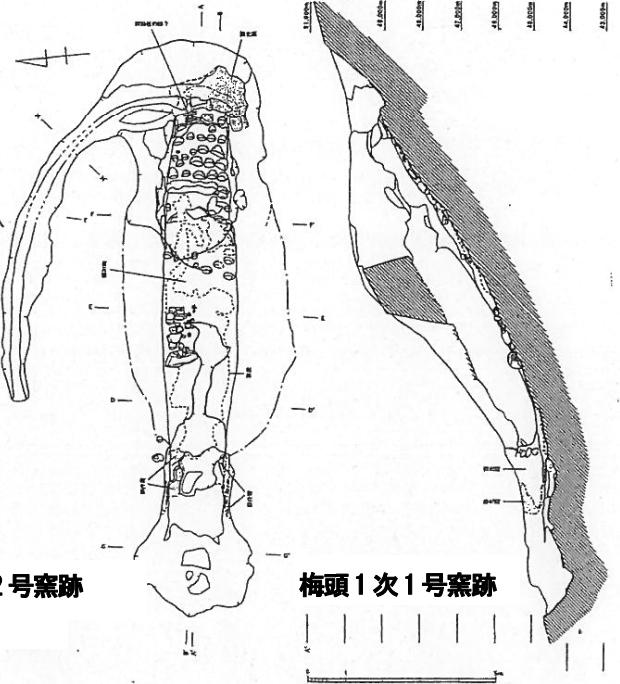


野添9号窯跡

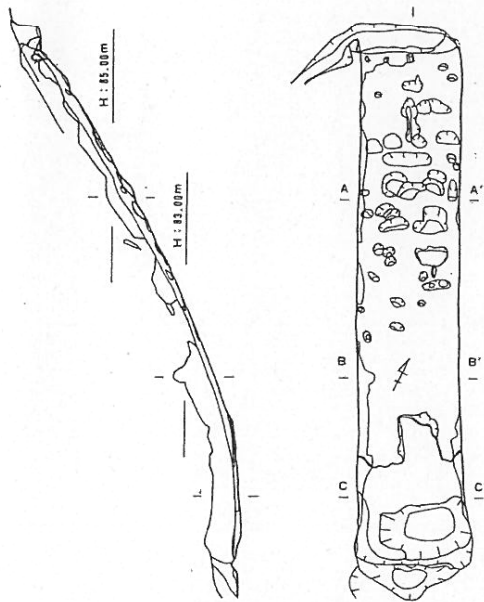
六世紀末、七世紀初頭



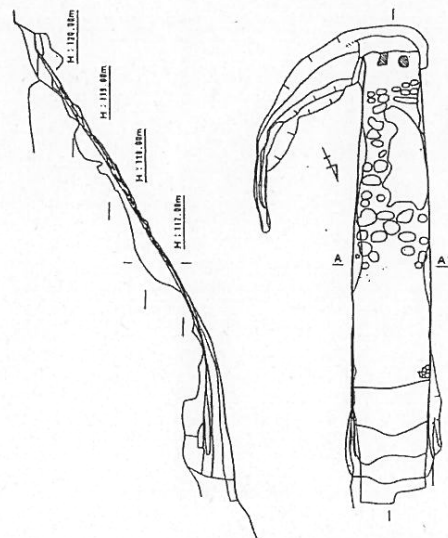
中通A-2号窯跡



梅頭1次1号窯跡



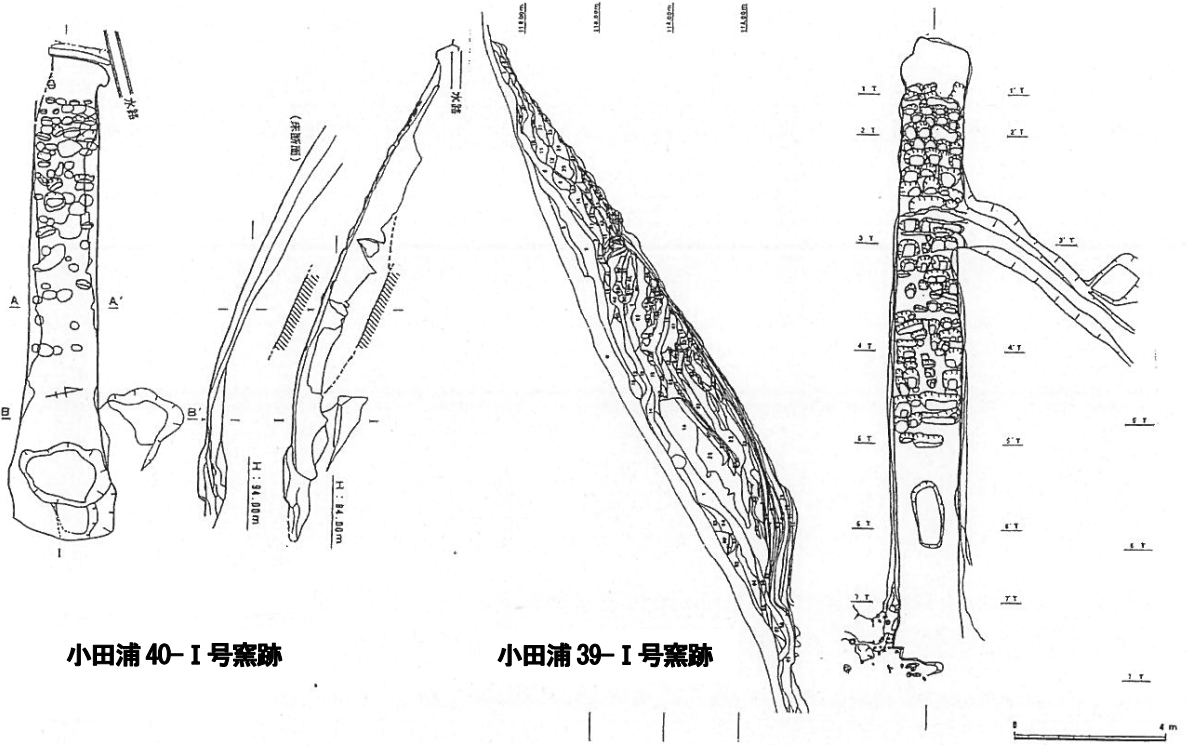
小田浦33-I号窯跡



後田65-I号窯跡

第10図 牛頸須恵器窯跡窯体構造変遷図② S=1/200

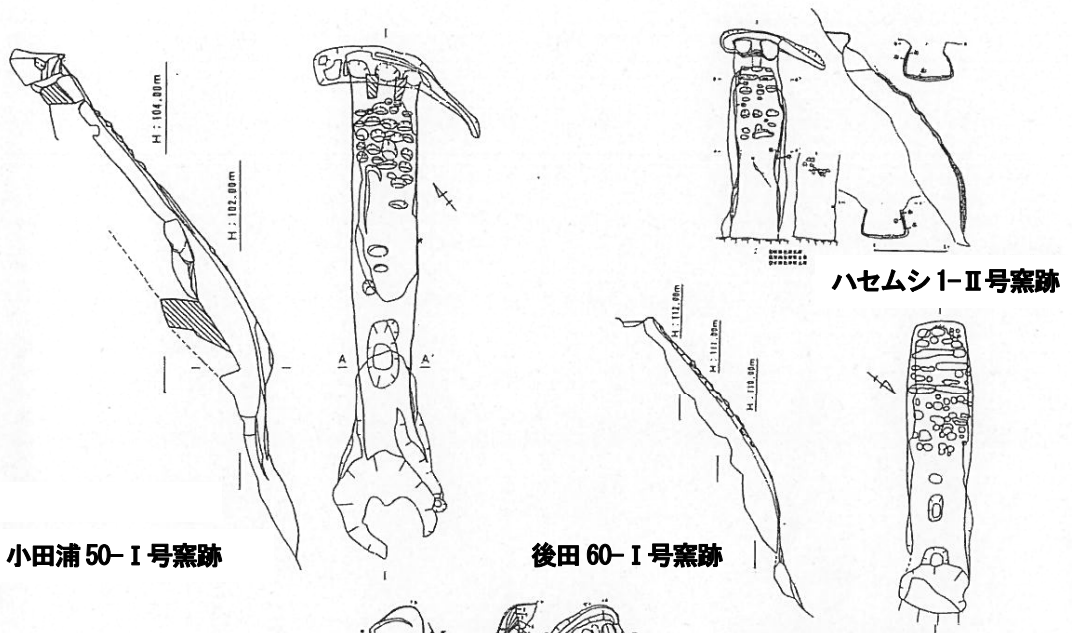
七世初頭中頃



小田浦40-I号窯跡

小田浦39-I号窯跡

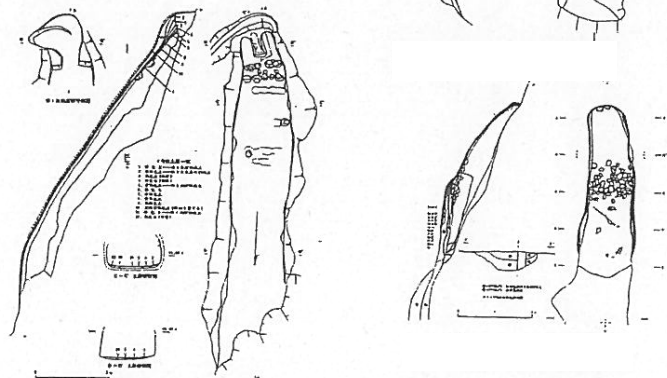
七世初頭中頃



小田浦50-I号窯跡

後田60-I号窯跡

ハセムシ1-II号窯跡

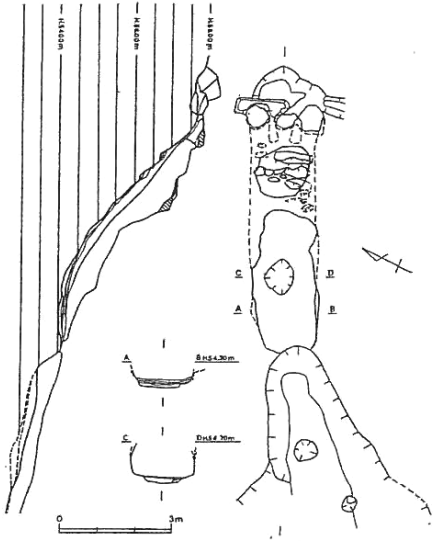


宮ノ本4号窯跡

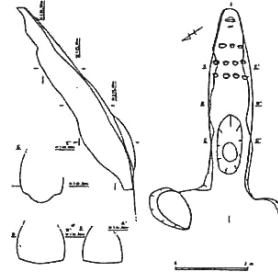
本堂3次1号窯跡

第11図 牛頸須恵器窯跡窯体構造変遷図③ S=1/200

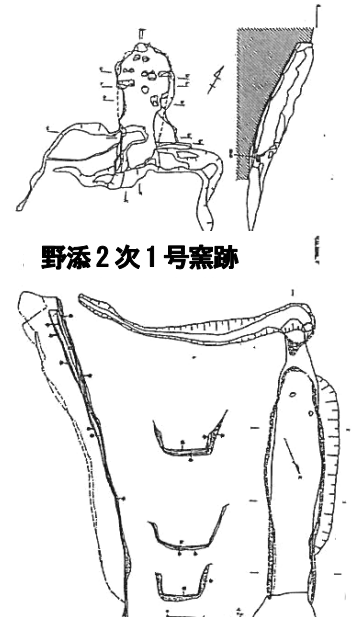
七世紀後半



上平田2号窯跡



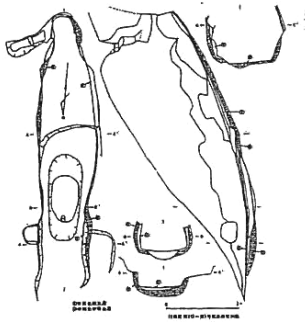
後田61-IV号窯跡



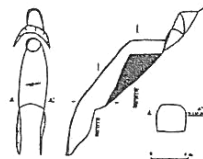
野添2次1号窯跡

ハセムシ27号窯跡

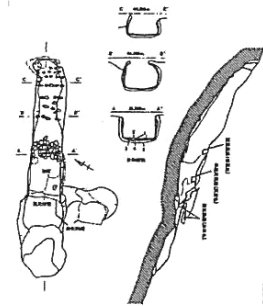
八世紀前半



ハセムシ12-IX号窯跡

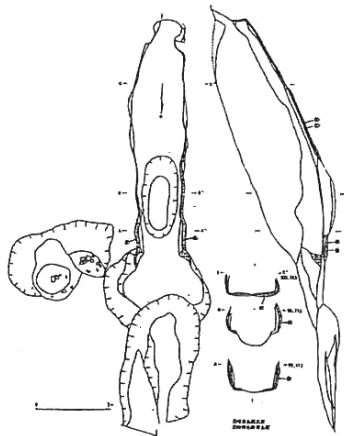


後田61-I号窯跡

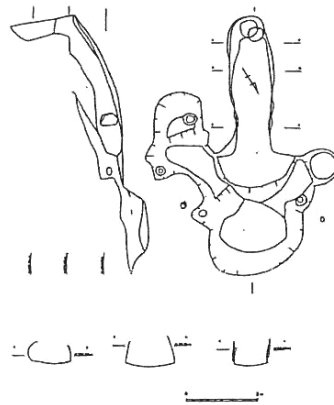


本堂5次9号窯跡

八世紀中頃〜後半



ハセムシ12-V号窯跡



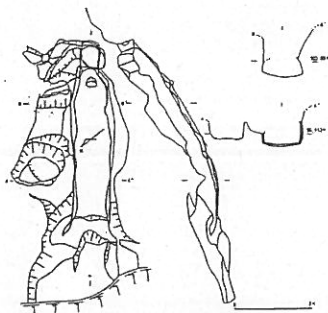
石坂C-1号窯跡



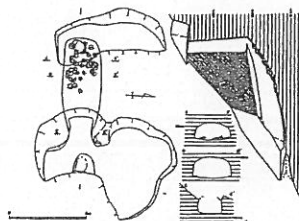
ハセムシ26-I号窯跡



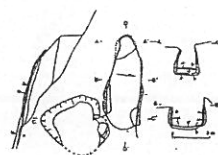
八世紀後半



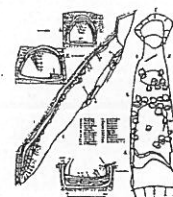
ハセムシ 12-Ⅲ号窯跡



井手 42号窯跡

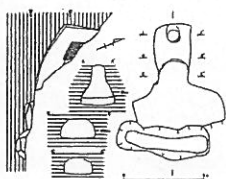


ハセムシ 18-Ⅶ号窯跡

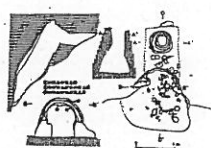


宮ノ本 8号窯跡

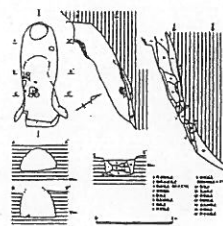
八世紀末～九世紀初頭



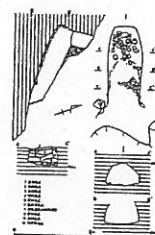
井手 24号窯跡



ハセムシ 18-Ⅲ号窯跡

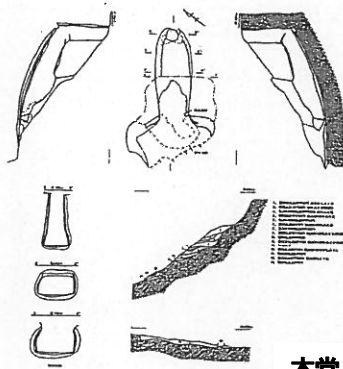


道ノ下 11号窯跡



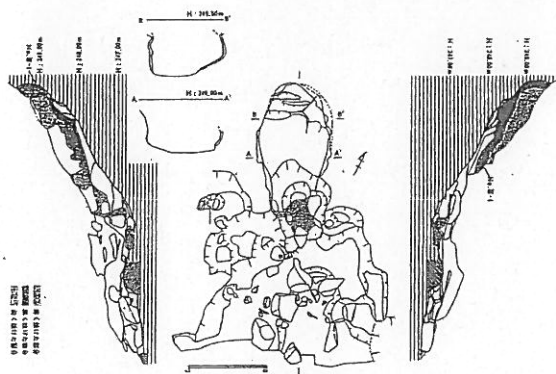
道ノ下 12号窯跡

九世紀前半



本堂 5次 6号窯跡

九世紀中頃



石坂E-3号窯跡

#### ④ 焼成須恵器の分布

牛頸須恵器窯跡で焼かれた須恵器の分布に関しては、古墳時代と奈良時代ではその様相が大きく異なることが指摘されている。すなわち、古墳時代には、福岡平野周辺がその分布の主体であり、遠隔地での出土事例が知られていないのに対し、奈良時代になると律令制下の国を越え、旧肥前国や豊後国での出土事例（胎土分析結果）が報告され、さらに肥後国内や西海道各国においても、牛頸産の可能性の高い（肉眼観察結果）製品が出土しているという状況である。こうした奈良時代における広域流通の背景としては、大宰府を介した流通システムが存在した可能性が想定できる。

#### ⑤ 窯跡関連集落

窯跡関連集落としては、上園遺跡や本堂遺跡などが挙げられる。これらの遺跡では、堅穴住居跡の床面から粘土塊が出土したり、粘土を貯留した土坑が確認される。

このことは、須恵器生産との関連性を窺わせるものであり、須恵器工人の集落と考えることができる。牛頸須恵器窯跡の範囲外になるが、春日市下大荒遺跡で粘土採掘坑の確認例がある。しかし、牛頸須恵器窯跡の広がりや生産量を考えると、未確認のものも数多く存在するものと想定される。



本堂1次SC05粘土出土状況

#### ⑥ 工人の墳墓

須恵器工人の墳墓としては、小田浦古墳群や後田古墳群から須恵器窯を掘る時に使用したと考えられるU字形鋤先が出土しており、工人墳墓として想定されている。また梅頭遺跡1次1号窯跡では、操業終了後に墳墓として転用され、銀象嵌鉄刀・鉄鍬・ベンガラ入り須恵器杯身などが副葬された事例が確認されており、須恵器工人の出自等を検討する上で貴重な資料といえる。



梅頭窯跡遺物出土状況



後田古墳群全景



梅頭1次鉄刀銀象嵌

	蓋杯 (杯H・G)	高杯	罍	壺	高台付壺	壺	提瓶	平瓶	甕
ⅢA期	1, 2	3, 4, 5, 6, 7, 8	9	10	11			12, 13	
ⅢB期	14, 15, 16, 17	18, 19, 20, 21, 22, 23, 24	25, 26	27, 28	29	30	31, 32		
ⅣA期	33, 34, 35, 36	37, 38, 39, 40, 41	42	43, 44	45, 46	47, 48	49, 50, 51	52, 53	
ⅣB期	54, 55, 56, 57, 58	59, 60, 61	62, 63	64, 65	66, 67	68, 69	70, 71	72	
V期	73, 74, 75, 76, 77, 78, 79, 80, 81, 82	83		84, 85			86, 87		

(出土遺構一覧)

ⅢA期 1~13

野添6号窯跡

ⅣB期 54・57・59・60・66・67・70~72  
55・56・58・61~65・68・69

後田46地点灰原  
月ノ浦1号窯跡

ⅢB期 14~17・20・21・24・29・30  
18・19・22・23・25・28  
26・27・31・32

野添9号窯跡  
野添12号窯跡  
惣利1号窯跡

V期 73~78  
79~87

小田浦50-I号窯跡  
後田60-I号窯跡

ⅣA期 33~42・45・48・52  
43・44・46・47・49  
50  
51  
53

後田63-I号窯跡  
小田浦38-I号窯跡  
後田45-I号窯跡  
野添2次SB01  
小田浦37-I号窯跡

※杯A・B・G・Hは独立行政法人奈良文化財研究所の分類を準用している。

※各時期について、表の上位にあるものが古く下位のものが新しいと考えるものを配置するようにしたが、すべてではない。

※ⅣB期の杯Hと杯Gは並存する。

※V期の蓋杯については並存すると考える。

第14図 牛頭須恵器窯跡出土須恵器編年表①

	蓋杯(杯B)	杯(杯A)	高杯	盤・皿	壺	平瓶・その他	甕・鉢
VI期	88, 89, 90, 91, 92, 93, 94	95	96	97	117, 118, 119	98	99, 100
VIIA期	101, 102, 103, 104, 105, 106, 107, 108, 109	110	111, 112, 113	114, 115, 116	118, 119, 120	121, 122, 123, 124	121, 122, 123, 124
VII B期	125, 126, 127, 128, 129, 130	131, 132	133, 134	135, 136, 137	138, 139, 140, 141	142, 143	144, 145
VIII期	146, 147, 148, 149, 150	151, 152, 153	154			155, 156	157

(出土遺構一覧)

VI期 88・89・92・93・95~98 90・91 94 99 100	小田浦39-1号土坑 小田浦39地点灰原 井手X地点3号窯跡 後田66-1号窯跡 後田61地点灰原	VII B期 125~132・135~145 133・134	石坂C-1号窯跡 石坂C-2号窯跡
VII A期 101・102・107・110 117・118・121・123 103~106・108・109・119・122・124 111・114~116 112 113・120	井手X-1号窯跡 井手X地点灰原II 宮ノ本9号窯跡 ハセムシ2地区灰原 道ノ下17号窯跡 道ノ下窯跡群(K地区)灰原	VIII期 146・148・151・152・154・156 147・149 150・153・155 157	井手24号窯跡 本堂5次6号窯跡 日ノ浦遺跡SK13 石坂E-3号窯跡

※杯A・B・G・Hは独立行政法人奈良文化財研究所の分類を準用している。  
 ※各時期について、表の上位にあるものが古く下位のものが新しいと考えるものを配置するようにしたが、すべてではない。  
 ※VII B期の杯Bの場合は並存すると考える。

第15図 牛頭須恵器窯跡出土須恵器編年表②

## 2) 遺物

### ① 須恵器\*

時期的な型式変化は、陶邑窯跡群などを含む全国的な変化の方向と基本的には同じである。全体を通じて、牛頸須恵器窯跡特有の器種はなく、地域性をあまり感じさせない。

開窯期の須恵器蓋杯には、内面に同心円文当て具痕が見られる。日本最大規模を誇る陶邑窯跡群の影響と考えられる。7世紀前半までは、大甕を含めて多くの器種が焼かれている。蓋杯は天井部と底部が丸く、合せ口の杯Hが主体であるが、7世紀後半になると蓋につまみがつき杯身に高台がつく蓋杯（杯B）が登場し、量が増加して行く。

8世紀前半には、蓋杯や高杯など多くの器種が焼かれる。この時期の特徴としては、陶邑窯跡群と比べると、つまみの付かない蓋があること、高台がつかない杯が少ないことなどが挙げられる。また、8世紀後半になると大甕が生産されなくなり、焼かれる器種は蓋杯を含む一部の食器に絞られるようになる。9世紀になると蓋杯と杯が焼かれる程度である。現在、牛頸須恵器窯跡で最も新しいと考えられる石坂窯跡E地点では甕・大甕を含む生産が行われている。しかし、甕類の特徴は肥後地域によく見られる特徴的な器種であり、窯の操業にあたって、肥後地域の工人が関与したことが明らかである。



6世紀の須恵器



7世紀の須恵器



8世紀の須恵器



9世紀の須恵器

## ② 初期瓦

6世紀末から7世紀前半にかけて、須恵器とともに瓦を焼成している。太宰府市神ノ前2号窯跡、大野城市月ノ浦1号窯跡、野添13号窯跡、大浦2号窯跡、小田浦79地点2号窯跡などが確認されており、日本国内でも最も早い時期に瓦が生産されている。神ノ前1号窯跡では、国内最古級の瓦、月ノ浦1号窯跡では鴟尾や独特の瓦当文様が出土し広く注目されている。なお当該期の瓦は、消費地では那津官家の推定地である那珂・比恵遺跡から出土しており、関係の深さを知ることができる。

牛頸須恵器窯跡内における瓦陶兼業窯は7世紀前半をもって終焉するが、7世紀中頃には、春日市ウトグチ窯跡で瓦窯が確認されている。

ウトグチ窯跡は、牛頸特有の多孔式煙道窯を基本構造とする一方、焼成部は牛頸須恵器窯跡内では見られなかった有階有段構造の瓦窯の特徴を備えている。

7世紀後半以降については、牛頸須恵器窯跡では瓦の生産は確認されていない。特に8世紀以降は、須恵器生産と瓦生産の工人の分化が確立し、瓦生産は老司瓦窯や大宰府政庁周辺で行われ、牛頸須恵器窯跡は須恵器の生産に特化していったものと考えられる。



月ノ浦1号窯跡軒丸瓦

## ③ ヘラ書き須恵器

牛頸須恵器窯跡出土遺物のうち、最も重要な遺物として、ハセムシ窯跡12地点と本堂遺跡7次調査出土のヘラ書き須恵器が挙げられる。

ハセムシ窯跡出土の須恵器は、大甕の頸部に「筑紫前国奈珂郡 手東里大神マ得身 并三人奉 調大厩一隻和銅六年」などと記され、「筑前国手東里に住む大神部得身ら3名が、調(税の一種)として大甕を和銅6年(西暦713年)に納める」という意味を示している。

『延喜式』によると、筑前国は須恵器の調納国とされている。またこの記載内容は、古代税制の実態を示す極めて重要な資料として評価されている。

本堂遺跡7次調査出土の須恵器は、やはり大甕の頸部に「大神マ(部)見乃官」と記されていた。大甕の年代は、7世紀前半～中頃と考えられることから、大化以前の部民制<sup>\*</sup>の存在を具体的に示す全国2例目の貴重な事例となるだけでなく、ハセムシ窯跡のヘラ書き須恵器に登場した「大神部」が、当該期にはすでに須恵器生産に関わっていたことを示す資料として注目されている。

なお、大阪府陶邑窯跡群など全国各地の須恵器生産地では、大神部を含むミワ系氏族が生産者として想定される事例があり、本例もこうした見解に合致するものと考えられる。



本堂遺跡7次調査出土「大神部見乃官」



和銅六年銘ヘラ書き須恵器

#### ④ 陶棺

野添遺跡7次調査2号窯跡から、全体像が復元可能な陶棺が出土している。7世紀前半のものである。九州における陶棺の出土は極めて稀で、福岡県4遺跡、佐賀県2遺跡が知られるのみで、うち3遺跡は牛頸須恵器窯跡内での出土例となる。

出土陶棺は須恵質四注家形と呼ばれる特徴を持ち、その生産技術が畿内地域からもたらされたことは確実であり、密接な情報交流があったと想定されている。



野添遺跡7次調査地出土陶棺

#### ⑤ 瓦塔

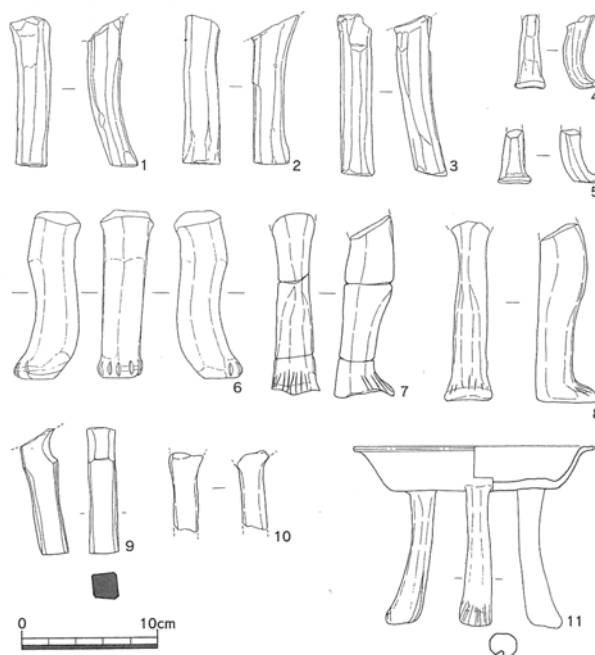
本堂遺跡5次調査2～5号窯灰原から瓦塔が出土した。屋根の部分のみの出土であり、瓦塔全体が焼成されたかどうか明らかではないが、筑前地域で初めて生産が確認された。瓦塔の発注者、供給先などはまだ不明である。



本堂遺跡5次調査出土瓦塔

#### ⑥ 三足須恵器

小田浦38-I号窯跡からは三足付壺の脚部が5点出土している。類似資料は九州で5遺跡、四国で1遺跡が確認（1993年時点）されているが、生産遺跡としては飯塚市井手ヶ浦窯跡出土例と牛頸出土例が知られるのみである。



- |           |            |
|-----------|------------|
| 出土遺跡名     |            |
| 1～5       | 小田浦38-I号窯跡 |
| 6         | 日ノ浦遺跡群     |
| 7・8・10・11 | 塚原遺跡群      |
| 9         | 惣利西遺跡      |

第16図 三足土器(棒状土製品)実測図

### (3) 牛頸須恵器窯跡の歴史的価値

以上、牛頸須恵器窯跡の遺構と遺物の特徴を述べた。ここで、歴史的価値についての評価を行いたい。

まず挙げられるのは、6世紀中頃から9世紀中頃にかけての約300年にわたって窯が作られ、その総基数は500基を超える窯跡群であることである。このように、1ヶ所で長期間・大規模に操業された窯跡群は九州では他に無く、最も大きな特徴である。

窯体構造では、6世紀末頃から7世紀前半を中心とする多孔式煙道窯という極めて特徴的な構造の窯を採用することが確認できた。この種の構造窯は九州では類例を見ないが、日本最大の須恵器生産地である陶邑窯跡群で1例確認されている。また、陶棺の特徴は畿内地域のものである。このように、牛頸須恵器窯跡と陶邑窯跡群の双方向の交流について遺構・遺物の面から裏付けることができる。

ヘラ書き須恵器に見える須恵器工人に注目すると、7～8世紀代の牛頸窯において大神部の氏族名をもつ工人が存在することが分かる。大神部は畿内系の氏族であり、牛頸窯と畿内地域の関係を知ることができる。

さらに、梅頭遺跡1次調査1号窯跡のように須恵器窯を墳墓に転用した事例は、被葬者が在地の人ではないことを如実に物語っている。

これらのことから、牛頸須恵器窯跡は畿内との結びつきが非常に強い窯跡群として見ることができ、中でも陶邑窯跡群との関わりが注目される。こうした畿内との結びつきの強さを考えると、牛頸窯の管理者として「那津官家」を挙げることができる。『日本書紀』によれば、「那津官家」は磐井の乱後の宣化天皇元年（536）に大和政権が設置したものであり、その時期は牛頸須恵器窯跡の操業開始時期とほぼ同じ頃と考えられる。このような背景を踏まえると、牛頸窯は大和政権が筑紫を支配してゆく際に計画的に配置されたものと考えられる。

このように、牛頸須恵器窯跡は畿内との強い結びつきが考えられる一方で、初期瓦のように朝鮮半島からもたらされたと考えられる技術も有している。技術の流れは、畿内だけではなく朝鮮半島との関係も確認でき、多元的であったと考えられる。

また、牛頸須恵器窯跡は白村江の戦いの敗戦をきっかけとする水城・大野城が築造された時期を境に、窯体構造と生産器種が大きく変化している。それは、小形の直立煙道窯での食器を中心とする小形器種の生産であり、それまで行っていた甕・大甕等の大形品を含む生産から生産志向を大きく変化させた。このことは、白村江の戦いの敗戦以後、筑紫に逗留するようになった外国の使者をもてなす饗宴のためのものであるとともに、このころ成立する大宰府で使用される食器についても生産が行われたものである。この時期には牛頸窯での生産窯が増大し、筑前地域において須恵器生産を継続する窯跡群が見られないことから、一国一窯体制がとられたものとする事ができる。

牛頸ハセムシ窯跡で見ると、須恵器は調として貢納される対象であったことは明らかである。筑前国は『延喜式』で須恵器の調納国として定められていたことが知られ、牛



頸窯がその役割を担っていたと考えることができる。牛頸窯で生産された須恵器は大宰府へ貢納されたと考えられる。奈良時代になって、前代よりも広範囲に供給が行われていることはこのことと無関係ではない。牛頸窯の製品は広く西海道各国へ運ばれ、西海道<sup>\*</sup>一の須恵器窯群となる。

このように、牛頸須恵器窯跡は長期間・大規模な操業が継続され、地方にありながら畿内との密接な関係を有していた。その背景には那津官家の存在があり、牛頸窯は大和政権と直接結びつき、須恵器生産を行っていた。その関係は大宰府へと引き継がれ、九州の須恵器生産をリードしていた。全国的に見ても、極めて重要な須恵器生産遺跡である。